

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	井上靖「風濤」論：被支配国の視点と内面描写
Author(s)	高木, 伸幸
Citation	国文学攷, 246 : 1 - 14
Issue Date	2020-06-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050144
Right	Copyright (c) 2020 by Author
Relation	



井上靖「風濤」論

——被支配国の視点と内面描写——

高木伸幸

はじめに

井上靖の「風濤」は第一部が昭和三十八年八月、第二部が同年十二月、計二回に分けて『群像』に掲載された。元寇を日本の側からでなく、元と日本の狭間に置かれていた高麗の立場より描いた長篇歴史小説である。

この「風濤」は良くも悪くも、史実を尊重した「記録体」の小説と評されてきた¹⁾。また「風濤」がそのような史実重視の姿勢で執筆された理由として、本作連載より約二年半前、作者と大岡昇平の間で戦わされた〈『蒼き狼』論争〉の影響が指摘されている²⁾。

「風濤」には井上靖の詳細な史料調査の結果が反映されており、そこには確かに大岡昇平との論争を意識した形跡が認められよう。しかし井上靖が「風濤」において、如何なる形で史実を尊重し、自らのモチーフをどのように表しているのか、実証的な考察が為され

てきたとは必ずしも言えない³⁾。

本論では「風濤」の本文と井上靖が用いた創作史料を対比させることによって、この小説における井上靖の創作方法をより具体的に明らかにしたい。そしてその上で、井上靖が「風濤」において、大岡昇平の批判に対して如何なる回答を示し、その中にどのようなモチーフを託したのか、考察を進めてみたい。

—

「風濤」の第一部は、元の支配下に置かれた高麗が、日本征討を目指す元より様々な要求を受け、元軍と高麗軍で構成された、その第一次日本出兵が失敗に終わるまでを描く。第二部は、再び日本征討を目指す元から高麗がやはり様々な要求を受け、元軍、高麗軍に宋軍も合わせた第二次日本出兵が、これまた失敗に終わるまでを描く。全篇に亘って世祖フビライが元の統率者として物語の背景に存

する一方で、第一部では高麗王の元宗が、第二部では元宗の死後に即位した忠烈王が、それぞれ高麗側の中心人物として描かれている。

この「風濤」の創作にあたって、井上靖は如何なる史料を活用したのであろうか。考察の初めに確かめておきたい。

井上靖は「あとがき」(『井上靖歴史小説集第五巻』昭和五十六年十月、岩波書店)で、元寇を高麗側より描くという「風濤」の発想は「池内宏氏の大著『元寇の新研究』(注、昭和六年八月、東洋文庫)から頂い」と記す。「風濤」の執筆に際して「池内氏の大著の他には、『高麗史』と『元史』だけを座右に置いた」と書いている。

結論から記せば、ここで井上靖の挙げている三つの文献が、実際に「風濤」創作の主な参考史料であったと見て間違いない。そして松島栄一や熊木哲も指摘しているように、これら三つの中でも池内宏『元寇の新研究』が最大の依拠史料であったと判断できる。

例えば「風濤」では、その第一部で、元の第一次日本征討へ繋がっていく事件として、(林衍による王の廃立事件)、(崔坦なる人物による乱)、(還都に反対した三別抄の乱)等に大きく筆を割いている。第二部では、高麗国内で達魯花赤(元より高麗へ派遣されている駐節機関)が強い勢力を持ち始め、元の鎮国上將軍征東都元帥・洪茶丘が高麗へ様々な影響を及ぼしつつあったことを示す事件として、(齊安公淑、金方慶ら高麗政府の要人に対する誣告)、(金方慶に対する誣告と奉恩寺での訊問)を描く。対して池内宏『元寇の新研究』

に目を向けると、その第四章は「高麗に於ける林衍の廃立と崔坦の蒙古への叛附」、第五章は「高麗の還都と三別抄の叛」、第八章は「金方慶に対する讒訴と洪茶丘の奸策」と題されており、それらの本文を通して「風濤」執筆に必要な知識は概ねカバーできる。また「風濤」には元から高麗へ送られる詔書や、高麗から元へ送った国書が多数書き下し文で引用されているが、それらの大部分は原文が『元寇の新研究』に掲載されているのである。井上靖がそこから得た材料を具体的にどのように用いたのか、それについては後に詳しく検討するとして、同書が「風濤」の物語の骨格を担っていることは確実と言えよう。

残る「高麗史」と「元史」のうち、前者について井上靖は「明治四十一年十一月発行の国書刊行会本」を用いたと具体的なテキストを明かしている。その検証として、国書刊行会版『高麗史』(以下『高麗史』)と小説の本文とを少し対比させてみたい。

「風濤」第一部の終わり近くのこと、至元十一年(元宗十五年)五月十一日に燕都において高麗太子の諱は、元より降嫁された公主クツルガイミシと「婚儀の式」を挙げる。その後、元宗の崩御に伴い諱は忠烈王として即位し、クツルガイミシは王妃として迎えらる。そのクツルガイミシが高麗へ入国する様子を次のように描いている。

実際に忠烈王は枢密院副使奇蘊を公主を迎えさせるために元

に遣わしてあった。(中略) 忠烈王は公主を迎えるために西北面に幸した。(中略) 公主の開京にはいる日は、妃妾、諸宮主、宰相たちの室、いづれも礼服を纏って都の北郊まで出向き、宰相や百官たちは国清寺の門前に並んで、公主の駕を迎えた。(中略) 忠烈王は都城へはいる前に公主を輦に迎え、公主と輦を同じくして都へはいった。(中略) 一人の老人が街上で、紙に公主を迎える賀詞を書いた。(中略) その最初の詩句は次のような言葉であった。／＼ 凶らざりき、百年の鋒鏑の余、復太平の期を見んとは、／＼ 輦が王宮へ入ると、世祖に命じられて公主に従って来た脱忽は、まず穹廬を張り、白羊の膏を以て、それを蔽った。対して『高麗史』の卷八十九列伝第二「后妃二・忠烈王齊国大長公主名忽都魯揭里迷失」を見ると、元公主の高麗入国について、次のように記している。

遣相密院副使奇縑逆公主于元王幸西北面迎之又令妃嬪諸宮主及宰相夫人出迎宰相百官迎于国清寺門前王与公主同輦入京父老相慶曰不凶百年鋒鏑之余復見太平之期時帝令脱忽送公主脱忽先至張穹廬蔽以白羊膏(相密院副使奇縑を遣はして公主を元より迎へしめ、王西北面に幸し之を迎ふ。又妃嬪・諸宮主及び宰相夫人をして出でて迎へしめ、宰相百官国清寺の門前に迎ふ。王公主と輦を同じくして入京す。父老相慶て曰く、「凶らざりき百年鋒鏑の余、復た太平の期を見んとは」と。帝脱忽をして公主を送らしめ、脱忽先に至りて穹廬を張り、蔽ふに白羊の膏を以てす。)

井上靖がこの記述を直接参照し、該当の場面を描いたのは明らかであろう。

ちなみに『元寇の新研究』では、第七章「元の第一次日本征伐―文永の役」の中で「(前略) 謀が燕都に於て世祖の女忽都魯揭里迷失(公主(齊国大長公主)に尚したのは、本年(至元十一年)五月十一日(丙戌)であつた」と記しており、巻末年表にもその旨記載している。しかし、それ以上の詳しい記述は見られない。井上靖は一次史料の『高麗史』をも直接参照することで、『元寇の新研究』には欠けている史料を補い、小説の場面をより詳しく史実に沿った形に仕上げたのである。⁵⁾

残る「元史」について、井上靖は具体的なテキストが何であつたか記していない。手掛かりとして、作中の一人の人物名に留意したい。「風濤」では、世祖が日本へ送る国信使の人名を「赫徳」と記している。井上靖はこの人物の名称に関連して、次のように書く。¹⁰⁾

(前略) 人名は、明らかに元側の人物と思われるものは『元史』記載のものを使い、高麗側の人物と思われるものは『高麗史』記載のものを使った。一例を挙げると同一人物が『元史』では「赫徳」、『高麗史』では「黒的」となっている。この場合は明らかに元から派遣されて来た人物であるので、『元史』の「赫徳」の方を採用している。

該当の人物について、『元寇の新研究』および『高麗史』を見ると、

なるほど「黒的」となっている。一方「元史」においては、井上靖の「風濤」執筆時、既に日本の大学図書館等に所蔵されていた一般的なテキストを見てみたい。次の二種類が挙げられる。清・乾隆四年（一七三九年）に武英殿で校訂・刊行された武英殿本（『欽定元史』）の系列と、その武英殿本の不備を正す目的で、商務印書館より一九三五年十二月に初版が刊行された『百衲本二十四史・元史』の系列である。これら二つの中、『百衲本二十四史・元史』では該当の人物名が「黒的」となっているのに対し、『欽定元史』では確かに「赫徳」となっている。¹¹ 井上靖は武英殿本を主に活用したと推察できよう。

なお管見によれば当時、日本の出版社より「元史」全体を収めたテキストは刊行されていない。しかし「元史」の一部を収めた選集であれば、和田清・石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝』（昭和三十一年九月、岩波文庫。以下「元史日本伝」）が出ていた。この「元史日本伝」でも表記は「赫徳」になっている。¹² 同書は「元史」の中でも元寇に関わる記述を収めたテキストである上に、井上靖の旧蔵書を保管・管理している神奈川近代文学館の井上靖文庫に所蔵もされている。¹³ 井上靖は「元史日本伝」を「元史」読解のいわば補助教材として用いたのであろう。

さらに井上靖は「風濤」の創作史料として、いわゆる「元史」ではないが、「新元史」¹⁴も活用した形跡がある。

「風濤」第二部には、宋軍より元に降った将の一人として范文虎が登場する。范文虎は、「元史」では伝が立てられておらず、¹⁵「元寇の新研究」においても、その人物像について詳しい記述は見られない。だが「新元史」を見ると、巻一七七列伝第七十四に「范文虎伝」があり、そこには以下のごとき記述が為されている。台北・開明書店版『新元史』¹⁶（一九三五年六月）より引用する。

宋咸淳中遷殿前副指揮使阿朮攻襄樊宋以文虎統禁軍來援遂蕃異志軍中為樂日与妓妾擊鞠宴飲不進攻比戰又不力兵屢敗所喪舟械甚多及襄樊陷給事中陳宜中請誅文虎賈似道庇之止降一官仍知安慶府（宋の咸淳中、殿前副指揮使に遷る。阿朮襄樊を攻め、宋文虎を以て禁軍を統へ來援す。遂に異志を蓄へ、軍中に樂を為し、日妓妾と擊鞠宴飲し、進攻せず、戦う比に又力めず、兵屢敗れ、喪ふ所の舟械甚だ多し。襄樊陥るに及び、給事中陳宜中文虎を誅するを請ふも、賈似道之を庇ひ、止だ一官を降すのみにして、仍ほ知安慶府たり。）

「風濤」第二部において、范文虎の人物像を描いた以下の文章が、この「新元史」の記述を活かしていることは、言うまでもあるまい。世祖の問いに范文虎が答えた内容を記している。

元将阿朮に依って襄陽城が攻め落される時のことであるが、范文虎は命を受け、禁軍を率いて襄陽城救援に馳せ向った。その時范文虎は軍中で妓妾と宴飲して、すっかり酩酊し、ついに進軍の機を失した。ために戦は宋軍に不利となり、襄陽城は落

ち、范文虎はすんでのところ、死罪に問われるところであったが、さいわい一官を免じられて知安慶府となることで収まった。以上のごとく、井上靖は「風濤」創作に必要な基本的知識を主に池内宏『元寇の新研究』より修得していた。不足する部分については一次史料の「高麗史」「元史」によって補っていた。「高麗史」は国書刊行会版を使用し、「元史」は武英殿本の『欽定元史』を主に活用しながら、岩波文庫「元史日本伝」や「新元史」も参照し、より広く文献を漁っていたと言い得る。

井上靖が史料を精査し、史実尊重の姿勢で「風濤」を執筆したことは、ひとまず確認できたと言えよう。

二 (1)

井上靖が最大の依拠資料である『元寇の新研究』をどのように活用したのか、少し詳しく検討したい。

「風濤」第一部の一章、小説全体の冒頭部から見てみたい。高麗の太子僂は降表を持って蒙古に入り、憲宗崩御後の後継者と目されているフビライと対面する。最初の面会は短いものであったが、僂はフビライから温かい言葉をかけられる。僂は亡き高宗のあとを受けて高麗王・元宗となり、フビライも蒙古の合罕・新帝世祖として即位する。元宗は高麗が降伏するにあたって元に希望条件をいくつか出していたが、世祖フビライは「その殆ど総てを容れた」「温情に

溢れた国書」を返して来る。「これまで蒙古の過酷な要求を考えると到底信ずることができぬような寛大な措置であり、言辞であった」。しかし、その後、フビライは「好銅二万斤の進献」等を命じてくる。そしてそれに十分応じられない高麗に対して、さらに厳しい文言の詔書を送って来る。「余は卿の奏請したことはすべてこれを聞き届けた」「即刻それを履行せよ」。元宗は直ちに使者を送るも、その使者は追い返されてしまう。元宗は改めて国内の状況を詳細に説明した長い文面の書を送り、「履行の延期方を願ひ出た」。世祖フビライより「こんどは寛大な言辞で綴られた詔」が返されて来た。

対して『元寇の新研究』。まずその第一章「蒙古の高麗征伐」において、高麗の太子僂が元に入朝し、降伏した経緯を解説している。次いで第二章「世祖の高麗懐柔」では、世祖忽必烈(注、作中フビライ)が「高麗の要望する条項の殆ど総てを容れた」ことを説明した上で、以下のように考察している。

かくの如く世祖は高麗に対して頗る寛大なる態度を示したが、それは過去三十年間の用兵の結果を利用して、根本的に此の国を服属させようとする一の手段であつたにちがひない。随つて時にはまたその厳肅なる一面を現はし、彼れをして徒らに恩に馴れさせないやうにした。

その後、忽必烈は「好銅二万斤の進献の命」を出し、「其の履行についての返答を求めた」。高麗が「国内の疲弊の状を陳べ、要求

事項の履行の延期を哀願するに及び」、忽必烈は「再び寛大なる態度を示した」。

井上靖がこれらの記述を参照し、「風濤」第一部の一章を創り上げたことは明白であろう。物語の内容はもちろん、一部の細かな文言まで、『元寇の新研究』のそれと一致している。その上で、「風濤」と『元寇の新研究』それぞれの視点の置き方に注意しながら、「風濤」におけるフビライと元宗の人物造形を考えてみたい。

『元寇の新研究』第一章、第二章では、その表題から窺われるように、蒙古の側、「世祖忽必烈」の視点から考察を進めている。特に「寛大なる態度」とその後の「敵愾なる一面」が高麗を服属させるための「手段」だという、世祖の策略に踏み込んでいる。

一方の「風濤」。世祖が如何なる考えを抱いているか、全篇を通して彼の内面から描き出すことはない。反対に元宗については世祖と接し、世祖の命を受ける形で、その心境に多く筆を割いている。井上靖は『元寇の新研究』で確認できる史実に従いながらも、それらの材料を高麗側の視点に置き換えて描いているのである。

作中で元宗がフビライとどのように関わっているか、具体的に確かめてみよう。元宗はまだ太子・僖であった頃、初めてフビライと面会し、その温かい態度から「一種の陶醉感と言っているいい思いを味わい」、高麗王・元宗となって世祖の寛大な詔諭に接した時には「慟哭」が突き上げてきた。かくて元宗は「高麗朝に於けるただ一人の

世祖鼻眞」となり、「世祖フビライに対して温情を求め、それに依って国を樹てようと考え」ていく。だが実際は、フビライより高麗へ過酷な要求が次々と突き付けられていく。第一部の最終六章に至ると、元宗は死を前にして、次のような心境を抱いている。

きのうまでは世祖の顔を眼に浮かべ、その中から温情を引き出そうと思うと、それはいつでも引き出すことができた。こちらの真意さえ相手に通じれば、必ずやこちらの言うことが解ってくれるに違いないと思われる顔であった。ところが、元宗は今朝からどういふものか、いくら世祖の顔を眼に浮かべても、いつもの世祖の温顔は浮かんで来なかった。冷酷と言うのでもなく、貪欲と言うのでもなかった。ただ、自分に対かい合っている者の言うことを、それを聞くというような聞き方では何も聞いていないひどく大きな顔であった。(中略)高麗を己が版図に入れようと思ったらそうする顔であり、日本征討を高麗の犠牲の上に為そうと思ったら、それを必ず為しとげる顔であった。／(中略)世祖フビライがいかなる人間であるか、いまにして初めて自分なりの掴み方をするのができた筈であったが、それでいて、やはり世祖の顔を眼に浮かべずにはいられなかった。『元寇の新研究』において、元宗がこういっただけではない。あくまで井上靖の創作である。しかし単なる想像でなく、『元寇の新研究』

に見る世祖の政策について、それを受け取る高麗王の立場から捉え直した内面描写と言える。

つまり井上靖は『元寇の新研究』を通して、元と高麗の関係、特に世祖の高麗政策について詳しい知識を得、それを抛り所としながら、被支配国の立場に置かれた高麗人の心境を推察した。特に高麗王・元宗は、世祖フビライから見事に懐柔されてしまった人物だと解釈した。世祖を信じ、温情を求めつつも裏切られ、失意の中に死を迎えていく、その人物像と心の変遷を右のごとく表現してみせたのである。同時にその元宗の人物像を反射鏡として、支配国である元の君主・世祖フビライの強かで不気味な相貌をも間接的に浮かび上がらせていよう。

二 (2)

次に元宗の後を継いだ忠烈王の人物造形について、やはりフビライとの関係から考察してみよう。作中より忠烈王と世祖の関わりを掻い摘んで記せば、次のようである。

先にも触れた通り、忠烈王は元より世祖の娘、公主クツルガイミシを降嫁される。以来「忠烈王は朝臣にみな開刺することを命じた」。さらに忠烈王は、元の第二次日本征討にあたって、自ら「東征のこと、入朝して、その旨を受けん」と考え、「高麗が国を挙げて自ら日本征討の役へは行って行く」方針を取った。その上で、高麗に冷酷な

要求を突き付ける元の重臣・洪茶丘の職任を増やさないとなど、「高麗が希望する七つのことを世祖に奏し」、全て受け入れられた。忠烈王は世祖より「駙馬国王」、「大元帝国の皇帝フビライの女婿」として認められた。その結果として、高麗は元より日本征討に向けた加重的負担を強いられつつも、「僅かながら生きる望み」を手に入れることができた。

もはや説明するまでもなく、こういった忠烈王の足跡は『元寇の新研究』に典拠を見出すことができる。しかし、「風濤」と『元寇の新研究』では、忠烈王が元に対して何故そのような姿勢で臨んだのか、その理由については必ずしも解釈が一致していない。

先に『元寇の新研究』から挙げると、その第九章「再度の日本征伐の遂行せらるゝまで」の中で、次のような考察が為されている。

世祖の皇女忽都魯揭里迷失ツルガイミシが忠烈王の王妃となつてから、元室と王氏とは一家の如く、元と高麗とは一国の如くなつたが、忠烈王が自ら進んで蒙古の風俗を採用したのも注意すべき事実である。(中略)王が自国の風俗を改めるやうにしたのは、全く王の自由意志に本づいてゐるのである。かやうな点から考へてみると、今回の征日本計画に対する忠烈王の態度は、前回の役に先立つ父王元宗のその如く、専ら自国の利害関係からのみ割り出されてゐたとは思はれない。(中略)免れんと欲して免れ難い命の到るに及んでは、国家の力の堪へ得る限り、上国

の命に副ふやうに努めたのであらう。さうして到底堪へ難い負担については、あからさまに其の事情を陳弁し、又た当然要求すべきものは、進んで之を要求したのであらう。随つて世祖も快く其の奏請を認容したのであらう。

加えて同書は、忠烈王の姿勢から「自国の国力の消極的擁護政策」と「自国の苦境を緩くし、その負担と苦痛とを尠からしめむとする願望」を読み取る青山公亮の論考^①に触れ、自説とは「相当な距離がある」と否定している。

対して「風濤」では、忠烈王の日本征討への在り方について「同じ火を浴びるなら、自ら進んでその中へは行って行く方が、死中に活を求める理に適っていること」であり、それは「王が自らよしとして選んだ国を樹てて行く一つの行き方」だと記している。また忠烈王がまだ太子・諶であった頃、自ら開剃・辮髪し胡服を纏った心境について、以下のごとく表している。開剃・辮髪を批判する父・元宗へ諶が反駁している場面である。

(前略) 諶は、高麗が元から課せられている負担を少しでも軽減するためには、入朝者が辮髪し、胡服を纏うぐらいのことが何であろうか、と言った。(中略) 蒙古はもはやきのうまでの蒙古ではなく、大元国である。(中略) 現在、高麗は形の上では一国としての体面を持っているが、実質的には大元国の一藩属国であるに過ぎない。(中略) 彼等は父王が考えているよ

うに、高麗という国を独立した国としては考えていない。父王もこの際従来の考え方を、一藩属国の長として世祖に臣事するぐらいの気持に切り替えるべきである。そういう気持になった時初めて、国を樹てて行く道も自から開けて行くであらう。それ以外に高麗の生きて行く道はないと思う。(中略) 大国に隣して国を樹てるとは難しいが、大国の内側にはいって、その一部として国を樹てて行くことは容易である。

『元寇の新研究』も、「風濤」も、辮髪・胡服の採用と東征への姿勢について、忠烈王の自主性を強調している点では同じであらう。しかし前者では、それが元と高麗が親子関係になった故の忠烈王のより自然な復命と捉えているのに対し、後者では、忠烈王が高麗を守るためのやむを得ない決断としていることに注意されたい。「風濤」での表現は、『元寇の新研究』が否定した青山公亮の見解にむしろ近く、それを忠烈王のより前向きで積極的な姿勢に描き直したと言つてもよい。

昭和六年八月に刊行された『元寇の新研究』には、台湾、韓国を植民地とし、満洲事変勃発直前であった当時の日本の世相が反映された側面もあらう。被支配国が支配国へ、より自然な気持ちで服従する姿勢を読み取るその考察には、帝国主義的な思想が垣間見える。井上靖は戦後を生きる日本人として、承服しかねるところもあつたのではないか。『元寇の新研究』に見る史実を活かしつつも、その

奥にある忠烈王の心情については、やはり高麗の立場に寄り添い、解釈し直したのである。

かくのごとく井上靖は「風濤」の創作にあたって、『元寇の新研究』から得た材料を高麗の視点から捉え直し、元宗、忠烈王の内面を描き出している。元宗は世祖に懐柔されてしまった人物として、忠烈王は逆に世祖の懐に入った人物として、それぞれ造形している。「風濤」は元の世祖フビライに二人の対照的な高麗王を対置させることで、大国の支配下において圧制をどのように受け、如何にして活路を求めていくのか、その小国の苦悩を主要モチーフとして浮かび上がらせた小説と言えよう。

他にも「風濤」には、李祿用、金方慶、洪茶丘ら三名が主要人物として登場する。いずれも「高麗史」「元史」に名前が確認され、『元寇の新研究』でも多数言及されている。

このうち李祿用と金方慶は、ともに高麗王の重臣である。紙幅の都合で小説と史料の具体的な対比は割愛するが、井上靖は彼ら二人の人物造形においても元宗、忠烈王と同じ方法を用いていることを指摘しておきたい。世祖の視点による『元寇の新研究』の考察を、やはり高麗側から描き直す形で活用しているのである。¹⁸⁾

残る洪茶丘は、高麗人の血を引きながらも、元で重用された人物である。井上靖は、その洪茶丘に世祖の通訳あるいは使者を務めさせ、しばしば世祖の過酷な要求を高麗側の人間に直接伝える役割を

持たせている。特に第二部においては、誣告された金方慶に対して、洪茶丘が法恩寺で執拗に訊問する場面を描いている。これら作中の記述の中、第二部におけるそれは、先に触れた通り『元寇の新研究』の第八章に詳しい説明が見られる。一方、洪茶丘が伝える世祖の過酷な要求についても、その内容自体は同書で触れられている。だが、それらを洪茶丘が通訳や使者として高麗側へ伝えたとは書かれておらず、その部分は井上靖の創作と言える。¹⁹⁾高麗人の血を引きながら、金方慶に冷酷な仕打ちをしていた洪茶丘。井上靖はその彼の口から、さらに世祖の過酷な要求を伝えさせることで、元宗、忠烈王を初めとする高麗人の屈辱感を表し、小国の苦悩をより強調しているのである。

三

「風濤」連載から遡ること約十年、井上靖は西域を舞台とする短篇歴史小説「異域の人」(昭和二十八年七月『群像』)を発表している。「後漢書」を典拠としつつ、漢の西域経営に取り組む班超を主人公に据えたこの小説には、次のような一節が見られる。

班超は永平十七年(西紀七十四年)、「西域では一番の奥地にある疏勒国に使し」、隣国龜茲の隷属下より同国を救った。「故王の兄の子である忠を王位に就けて、以て国民の信望を得た」。班超は疏勒国を「西域経略の足場」とし、長年「疏勒国に留まった」。「班超

は馬術と弓に長けた美貌精悍な若い国王忠が好きだった。忠もまた班超を徳として好く遇した。しかし元和元年（西紀八十四年）、「多年班超と共に艱苦を共にして来た忠が叛いた」。「班超にとつて、忠の反抗は、全く理解し難い夷狄人の心であった」。班超は「忠を捕縛するや、自ら刀を抜いてその前に立った。曾て彼が愛した若い旧主の眼は憎悪に燃えていた。何の憎悪か判らなかつた」。

この小説では、右の二つとき物語を主に班超の視点から描いている。班超は漢より西域に派遣され、疏勒国を亀茲から救いつつも、その後には属国にした実は侵略者である。従つて右に見る疏勒国王・忠の人物像と心情については、あくまで支配国の立場から一方的な解釈を表しているに過ぎない。多年艱苦を共にした忠の反抗は、班超にとつて「理解し難い」事件とされている。しかし、被支配国の国王・忠の側に立てば、班超に対する「憎悪」は決して理解し難い感情であるまい。班超は支配者である故に、忠の心境を皮相的に捉え、その本心を見抜けなかつたのである。

ここに来て「風濤」のモチーフは、この「異域の人」の裏側を描いていることに気付かされよう。自国を元の属国にされた二人の高麗王、特に表面上は開削・辮髪をして世祖に従っていた忠烈王の内面は、疏勒国王・忠の心の奥底へと踏み込み、秘められた「憎悪」を露わにした表現とも言い得るのである。

この「異域の人」より約五年後、井上靖は「楼蘭」（昭和三十三年

七月『文芸春秋』）を書く。やはり西域を舞台にした短篇歴史小説である。西域の沙漠地帯に実在した小国・楼蘭について、「史記」に記された断片的な記述を手掛かりに描いている。²⁾楼蘭の国民は、常に匈奴の脅威に晒され、時に西域経営に手を伸ばす漢の支配下に置かれ、いわば大国と強大な騎馬民族の間で翻弄されていた。「風濤」は小国の苦悩というモチーフを、直接にはこの「楼蘭」から受け継いでいるのである。同作を通して、井上靖は「異域の人」を書いた時点ではまだ持ち得なかつた、被支配国側に立った視点を獲得できたと見えよう。

さらに「楼蘭」より約一年を置き、井上靖は成吉思汗の生涯を描いた「蒼き狼」（昭和三十四年十月〜三十五年七月『文芸春秋』）を連載した。この作家の長篇歴史小説として、「風濤」の前作に位置している。大岡昇平はこの「蒼き狼」に対して、典拠と小説との関係を検証しつつ、「現代的動機のために、歴史を勝手に改変し」た小説だと批判した（『蒼き狼』は歴史小説か―常識的文学論(1)―〈昭和三十六年一月『群像』〉、成吉思汗の秘密―常識的文学論(3)―〈昭和三十六年三月『群像』〉。いわゆる〈「蒼き狼」論争〉の発端である。

「風濤」はこの大岡の批判を意識して、〈歴史の改変〉を避けるべく、井上靖が史実重視を徹底した小説と言われてきた。既に検証した通り、「風濤」には井上靖の詳細な史料調査が認められ、結論と

しては確かにその通りだと言えよう。だが、井上靖の歴史小説において史実重視の姿勢で執筆されたのは、「風濤」が初めてではない。例えば「天平の甕」では、「唐大和上東征伝」をベースに鑒真研究者・安藤更生より様々な助言と史料提供を受けていた。「風濤」は、このような創作姿勢を自ら踏襲し、史実重視をより徹底したに過ぎないとも見られる。本当に問題とすべきなのは、その史料精査の如何なる部分から、〈蒼き狼 論争〉の影響を読み取るかであろう。

大岡昇平の「蒼き狼」批判は、井上靖が「歴史を勝手に改変」した根拠として、「安易な心理的理由づけ」を挙げている。「蒼き狼」では、成吉思汗が出生の秘密を持ち、モンゴル伝承の〈蒼き狼〉を理想として、自ら狼となるべく大征服を行ったと記す。しかし主要典拠となった「元朝秘史」^①には、その心理を裏付ける明確な証拠は存しないとの指摘である。その批判の適否はさておいて、「蒼き狼」の主人公・成吉思汗の内面描写には、井上靖の主観的な想像が確かに表れている。例えば同作において成吉思汗は、自分と同じ出生の疑惑を持つ長子ジュチに向かって、「俺は狼になるだろう。お前も狼になれ」と心の中で語りかける。これなどは歴史上の人物として、いささか現代的過ぎる心理描写であり、リアリティーが十分保たれているとは決して言えない。

こういった「蒼き狼」批判を踏まえて「風濤」を捉え直してみると、元宗と忠烈王の人物造形、特に彼らの内面描写が特別な意味を持つ

て見えてこよう。既に検討した通り、井上靖はこの小説において、『元寇の新研究』に見る史実を高麗側の視点から捉え直し、また同書の考察の一部は自らの判断でより適切に解釈し直すことで、元宗、忠烈王の内面を描き出していた。それがどれだけ成功しているか賛否は分かれよう。しかし、この「風濤」の内面描写は決してただなる想像でなく、史料に基づいた作家の解釈、根拠ある想像に拠っている。「蒼き狼」に比すれば、決して「安易」ではなく、歴史的なりリアリティーは明らかに保証されているよう。

井上靖の歴史小説は、人間心理の表現について、肯定的には〈外面描写〉という評価が、否定的には〈掘り下げ不足〉という批判が繰り返されてきた。^②「風濤」についても実は同様の解釈が一部で下されており、作品全体を見渡した場合なら、それはその通りである。だが元宗、忠烈王の心情については、当てはまらない部分がある。本論に取り上げたごとく、「蒼き狼」とは異なる表現を用いて、この作家としては意外なくらい深く踏み込んでいた。

すなわち、この根拠ある内面描写こそ、井上靖が大岡昇平の批判を受けて導き出した新たな表現方法であった。歴史小説の創作において安易な想像を排除し、しかも自らのモチーフも活かさんとする、謙虚かつ真摯な創作姿勢が表れている。〈蒼き狼 論争〉への一つの回答が、このような形で示されているのである。

「異域の人」、「楼蘭」を経て、井上靖は被支配国に寄り添った視

点を既に創り上げていた。そのモチーフに根拠ある内面描写の方法が相俟って、「風濤」は井上靖文学の中でも特異な作風を見せる歴史小説として成立したのである。

おわりに

井上靖は「風濤」の創作にあたって、池内宏『元寇の新研究』を主な依拠史料とし、一次史料の「高麗史」「元史」にも直接当たって不足部分を補っていた。特に『元寇の新研究』については、そこに確認される史実や歴史解釈を高麗側の視点に置き換えることで、特に元宗、忠烈王の内面を掘り下げ、大国に支配された小国の苦悩を浮かび上がらせていた。その心理描写は、『蒼き狼』論争における大岡昇平の批判を踏まえた井上靖の新たな表現方法であった。同時にそこに託されたモチーフは、「異域の人」、「樓蘭」を通して深められた、作者の内なるモチーフでもあった。史実尊重を徹底する中、作家のモチーフを独自の方法によって表し、「風濤」は井上靖の歴史小説に新生面を拓いた一作と見做せるのである。

「風濤」連載より約二十四年後、井上靖は遺作となった「孔子」(昭和六十二年六月)平成元年五月『新潮』を執筆した。作者の論語解釈を架空の末弟子・蕪薑の語りを通して描いた長篇歴史小説である。井上靖はその蕪薑について、楚、呉の二大強国によって国を分割され、故国を喪った蔡国の民として設定し、大国に翻弄される小

国民の姿を追求した。「風濤」のモチーフは、遺作「孔子」へと連なり、蕪薑という語り手を生み出したことを最後に付け加えておきたい。

注

(1) 肯定的な立場を挙げれば、例えば小松伸六が、「抑制しきった筆、ひかえめな潤色、時空的なものの小説化」が為されている故に、『風濤』は歴史そのものを描いた歴史文学の一つの極北」と評している(井上靖著『風濤』、昭和三十八年十一月十四日『読売新聞(夕刊)』)。否定的な意見としては、江原正昭が、『風濤』第一部の発表から間もなく、「思想を抜きにした悪しき記録主義」の小説と断している(『悪しき記録主義―井上靖『風濤』〈群像〉八月号』と朝鮮史)、昭和三十八年九月七日『図書新聞』)。

(2) 曾根博義「井上靖における『歴史』」(『現代文研究シリーズ16井上靖』昭和六十一年五月、尚学図書)など。

(3) 松島栄一「風濤」(長谷川泉編『井上靖研究』昭和四十九年四月、南窓社)と熊木哲「風濤」(昭和六十二年十二月『国文学解釈と教材の研究』)では、井上靖の創作史料について作者の発言に基づいて検討している。特に後者の論文では、「風濤」第二章で忠烈王が世祖に粟の実を献上する一節(一二五字)を国書刊行会版『高麗史』のく短く短い本文(二十八字)と比較考察している。

(4) 松島栄一「風濤」

(5) 熊木哲「風濤」

(6) 川添昭二「蒙古襲来研究史論」(昭和五十二年二月、雄山閣)で、池内宏『元寇の新研究』(昭和六年八月、東洋文庫)について、「元・高麗側からのアジア史的視野に立った研究」として「昭和戦前期」における「蒙

古襲来研究の最大の成果」であり、「蒙古襲来研究の金字塔」だと評価している。このような研究書としての信頼度も考慮し、井上靖は同書を依拠史料に用いたと言えよう。

- (7) 例えは「風濤」第一部一章では、元宗が新帝として即位した世祖へ賀使を送り、次のことき「謝意を綴った詔書」を届けている。「恩靈ノ汪洋タル寤寐ニ感悦ス。慈母ノ季子ニ憐レミヲ鍾ムルトイエドモ、イズクンゾコレニ過グルヲ能クセン。小臣ヨリヒイテ後孫ニ及ブマデ、死ヲ以テ報ユルヲ為サン」。対して『元寇の新研究』第三章「世祖の高麗懷柔」では、以下のごとき返り点付きの漢文を引用している。高麗が「世祖の即位を賀し、「感恩の意を表した」「陳情表」の一節である。「恩靈汪洋、寤寐感悦、雖慈母鍾憐於季子、過此何能、自小臣遜及於後孫、以死為報」。
- (8) 「あどがき」(『井上靖歴史小説集第五巻』昭和五十六年十月、岩波書店) 参照。なお国書刊行版『高麗史』は三巻本で、「明治四十一年十一月発行」は正確には第一巻のみが該当する。第二巻は四十二年七月、第三巻は四十二年十月の刊行である。

- (9) 「風濤」第二部では、クツルガイミシが「高麗の王宮の中の生活に少しづつ慣れて行く」ように忠列王に思わせた出来事として、次のごとく描いている。「王は帰国してから、公主が自分の入朝中、毎夜の如く内府の楽器を出して伶官に命じて楽を奏せしめて日を追ったということを知った。宮中には層棚が造られ、千灯が点され、伶人の奏する楽の音は曉に及んだということであった。また生きた虎を庭に運ばせ、公主は園庭に登ってそれを見たという話も聞いた。このエピソードも『高麗史』巻八十九列伝第二「后妃二・忠烈王齊国大長公主名忽都魯揭里迷失」に記載された、以下の本文に拠るものと言えよう。「五年王在元公主出内府楽器命伶官奏樂竟日騰坊忽赤三番連日設宴又結層棚于宮中燃于灯且令伶人奏樂達曙又禿哥押生虎至公主登園亭觀之(五年、王元在在に、公主内府の楽器を

出^レし、伶官に命じて樂を奏せしむること竟日なり。騰坊、忽赤三番連日宴を設け、又層棚を宮中に結び、灯を燃やし、且つ伶人をして樂を奏せしむること曙に達す。又禿哥生ける虎を押し至らしめ、公主園亭に登り之を觀る。)

- (10) 「あどがき」(注(8)に同じ)。
- (11) 武英殿本系については上海集成図書公司『欽定元史』(二九〇八年十二月)で、百衲本系については商務印書館『百衲本二十四史・元史』の初版(一九三五年十二月)および縮印本(一九五八年十二月)で確認した。
- (12) 和田清・石原道博編訳『旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝』昭和三十一年九月、岩波文庫)では、この「赫徳」に注を付し、「赫徳はもと黒的につくる。清の乾隆帝のとき改めた」と説明している。同書の新訂版(昭和六十一年四月、石原道博編訳)では、「赫徳」を「黒的」に改訂し、「黒的は、清の乾隆帝のとき赫徳と改めた」と注を付す。熊木哲は先掲の論文で、この新訂版を参照し、「風濤」での「赫徳」表記が「元史」に拠ることを推察しつつも断定を避け、具体的なテキストの考察には至っていない。
- (13) 神奈川近代文学館ホームページ蔵書目録参照。なお他の「元史」テキストは同文学館井上靖文庫に所蔵されていない。井上靖は「風濤」の創作にあたって、「東洋文庫岡田英弘氏、京都大学人文科学研究所岩村忍氏、およびその研究室の方々」など、東洋史の専門家より助力を得ていた(「あどがき」(『風濤』昭和三十八年十月、講談社)。「欽定元史」等は彼らから紹介され、借り受けていたかと思われる)。
- (14) 「元史」は明代の洪武二年(一三六九)より宋濂・王禕を総裁として編纂された。しかし不備が多く見られた故、民国・柯邵忞は「元史」を補修、改訂し、一九一九年に「新元史」を完成させた。神田信夫・山根幸夫編『中国史籍解題辞典』(平成元年九月、燎原書店) 参照。
- (15) 注(11)前出の『欽定元史』より確認した。

(16) インタビュー録『わが文字の軌跡』(昭和五十二年四月、中央公論社。聞き手は篠田一士、辻邦生)と自伝エッセイ『過ぎ去りし日日』(昭和五十二年六月、日本経済新聞社)では、井上靖は件の人名表記について、「高麗史」に「赫徳」、「元史」に「黒的」との誤った説明をしている。台北・開明書店版『新元史』(一九三五年十二月)を見ると、該当の人物名は「黒的」になっている。井上靖は武英殿本『欽定元史』のみならず、この開明書店版など「新元史」も参照していた故に、かくなる説明の混乱が生じたとも推察できる。

(17) 青山公亮「弘安の役と高麗」(大正十四年十月『史学雑誌』第三十六編第十号)

(18) 例えば『元寇の新研究』では、第四章で林衍の廢立と叛乱者崔坦の蒙古への帰附に関連して次のように記す。「かくして林衍を誅する為めに準備せられた蒙古の出兵は、西京以下の六十城の占領に帰結したのである。(中略)しかも世祖は忙哥都(注、作中トレンカ軍)の東下を以て、林衍を誅する為めの出兵であるやうに粧ひ、彼れの本意を其の裏面に隠さうとした」。対して「風濤」では、第一部第三章で次のように描く。「林衍の爲した廢立問題を理由に世祖は高麗へ出兵しようとしているのである。(中略)そうした世祖が、たとえ不逞の徒(注、崔坦)であるにせよ、現在その地方の実力者として、高麗の北部一帯の地を挙げて帰附を願ひ出て来た時、どうしてそれを受け入れないことがあろうか。併し、李祇用はその考えを口に出さなかった。口に出すことが恐ろしくもあり、不吉にも思われたからである」。また『元寇の新研究』では、第七章で「世祖が方慶に殊遇を加へた」ことについて、「単に耽羅征伐の勞に報いたわけではなく」「更に方慶をして(中略)日本征伐に従事せしむる爲めであつたにちがひない」と記す。対して「風濤」では、第一部第五章で次のように描く。「金方慶はかかる世祖フビライの殊遇を耽羅征伐の恩賞とは受けとらな

で、やがて間もなく自分に重大な任務が課せられるものと考えていた。(中略)日本征討軍の發遣のことであることは言うまでもなかった」。これらの比較に見ることく、「風濤」は『元寇の新研究』の考察を材料に用いつつも、視点を世祖から高麗側に置き換え、李祇用、金方慶の内面描写として活用しているのである。

(19) 例えば「風濤」第一部二章において、世祖は高麗の重臣・李祇用へ「怒声」を發して命を出し、それを洪茶丘が「訳して伝え」ている。その際、世祖の命として記される本文(朕、爾が国に、師を出して戦を助けることを命ぜり)等は、『元寇の新研究』第三章に典拠が見られる。しかし同書において、それを洪茶丘が訳したとの考察は為されていない。

(20) 『わが文字の軌跡』参照。

(21) 井上靖は「蒼き狼」(昭和三十四年十月、三十五年七月『文芸春秋』)の創作史料として、那珂通世による「元朝秘史」の訳注書『成吉思汗実録』(昭和十八年九月、筑摩書房)を用いた。井上靖「蒼き狼」の周囲(昭和三十五年六月『別冊文芸春秋』)参照。

(22) 福田宏年「増補井上靖評伝覚」(平成三年十月、集英社)第五章「歴史小説の展開」参照。

〔付記〕

井上靖の作品引用は全て新潮社版『井上靖全集』全二十八巻別巻一(平成七年四月、十二年四月)に拠った。その他の引用文中、旧字体は新字体に改めた。「元史」テキストの系列および国書刊行会版『高麗史』、台北・開明書店版『新元史』の本文訓読については、別府大学の宮崎聖明准教授(東洋史)にご教示を仰いだ。記して厚くお礼申し上げます。

— たかぎ・のぶゆき、別府大学教授 —